

想うがままに

ぼくがイタリア最良に
なった理由ゆゑ

本誌編集委員 小寺山康雄

初体験は四一才の夏

ぼくの海外旅行初体験は一九八一年夏、四一歳のときである。当時、パリに留学していた杉村昌昭を頼って、二年前亡くなった尾崎ムゲンとつれあいの百合子さん、百合子さんの友人の女性（この人も亡くなった）、中北龍太郎夫妻、そしてほくら夫妻の七人で、パリからローザンヌを経て、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマをわずか一二日間で慌ただしく旅した。

杉村以外は、いずれも英語すらままならない語学劣等生なのに、JALバ

ックや農協ツアーはダサイ、旅は個人旅行にかぎると、粹がったまではよかつたが、出発する前に早くも前途の多難を予感させるできごとに見舞われた。

伊丹空港に着くと、尾崎百合子が大騒ぎしているではないか。なんとムゲンが来る途中の列車の網棚に鞆を置き忘れ、その中にパスポートが入っているという。幸い親切な人が三宮駅に届けられて、ムゲンはそれを取りに行っているが、もし間に合わなかったら、中北夫妻と四人で行ってくれと、百合子は半泣きしているのである。行くべきか、行かざるべきかと、ハムレットのよ

うに悩んだが、ムゲンは無事戻ってきた。海外旅行どころか新婚旅行も行かず、旅行はこれが初めてというムゲンはそれほど緊張しっぱなしだった。

杉村が面倒見てくれたパリは何ごともなく楽しくやっていたが、杉村が行してくれるはずだったイタリア旅行は「日本から三里塚の闘争団が来ることになり、その通訳とガイドを頼まれた。君らだけで行ってくれ」と、冷酷無情に告げられたときから雲行きが怪しくなるのである。

「何でも見てやろう」と、一カ月も一人でアメリカ旅行し、新婚旅行はエーゲ

海クルーズと洒落こんだ海外旅行エキスパートのはずの中北だが、ホテルとの交渉ひとつできない語学劣等生だった。あれでよく一人旅したものだど毒づいた。ぼくはとくれば、何を隠そうこれよく大学はむろん高校に入れてくれたものだど自認するレベルなのだ。

というわけで、専門は日本教育史で英語は二〇年近いブランクがあるムゲンがツアコンをやらざるをえなかった。人一倍責任感の強いムゲンは前日電話で次のホテルを予約し、乗る列車の時刻と出発駅を確認し、そこまでの交通手段を調べ、レストランでは料理の注文に至るまで、辞書と首っ引きで奮闘したのである。

おまけに出かける前に、被害にあった同僚からイタリアの治安の悪さを思いきり吹き込まれていたムゲンは、前後左右からスリかっぱらいとムゲンが決めつけた連中が来るたびに「はい、靴・ポケットに気をつけて」と、気が休

まる暇がない。そのうえぼくと中北はツイン部屋、夫婦水入らずなのに、尾崎夫妻はこぶ付きの三人部屋である。

ついにフィレンツェあたりで、ぶつつかんしてしまったが、律儀者のムゲンは「わしや、もう知らん」とは口が裂けても言わない。というよりも、ムゲンの性格からして言えないのである。六〇歳の若さで死んでしまったのは、きつとこの旅のプレッシャーが遠因に違いないと、ぼくは慙愧に堪えない。

「ベルリンゲルに会いたい」

とにもかくにもムゲンの奮闘で、旅の最終目的地ローマに着いた。ぼくにとつてローマは、コロッセオやカラカラ帝浴場、パンテオンやシステイーナ礼拝堂ではなく、なによりもP C I（イタリア共産党）本部のある街なのだ。

ホテルに着くやいなや、フロントに行って市内地図を広げ「パルティート・コムニスタ・イタリアーノ？」と、

唯一知っていたイタリア語を叫んだ。フロントの兄ちゃんは即座に「クワイ」と丸印をつけてくれた。さすがは反ファシヨレジスタンスの党、黨員数百万五十万（人口比でいうと日本では三百万に相当）、得票率三三%の党である。日本共産党代々木本部や日本社会党三宅坂本部をはたしてホテルのフロントマンが知っているだろうか、ぼくは感激してしまった。

P C I本部はリナシタ書店など党関係の建物と並んであったが、界限一帯は要所所に監視カメラが目を光らせていた。当時「赤い旅団」がP C Iの歴史的和解路線を潰すためかどうか、この路線の相方であるキリスト教民主党リーダーのモロを誘拐殺害したばかりであったので、P C Iも自衛していたのだらう。ものものしい雰囲気だった。ところがぼくらがラフな恰好で本部の建物に入っても、誰も咎めない。そのかわり玄関には仕事帰りとおぼしき

屈強な労働者がTシャツ姿で十数人もガードしていた。その中の責任者らしい男が「何か御用ですか」と聞いてくれた。「見に来ただけや」と、正直に言うのも愛想がないと思っただけは、とっさに「ベルリッングエル書記長にお会いしたい」と、言ってしまった。

てっきり「無理です」と、にべもなく断られると思ったのに、彼はほくらがどこから来たのか？ どの政党の人間か？ と、丁寧聞くではないか。しかたないので、日本人でソシアリストだと言ってしまったが、彼は一瞬怪訝な顔をした(と思っただ)。そうだ、ソシアリストは社会党員の謂だと気づいた。彼は「革命的新左翼」と、慌てて訂正したが、「日本構革派」と言うべきだったと、おおいに悔やんだのだった。

しかし、彼にとってはそんなことはどうでもよかったのだろう。「ちょっと待て」と言って、奥へ行った。しばらくして戻って来た彼は、残念だが書記

長は会議中で、その後もスケジュールが詰まっている。書記長の日程は一年先まで埋まっている(当時、ベルリッングエルは、『タイム』誌の表紙を飾るほどの国際的スターだった)。今度来るときはかなり前からアポを取った方がいい。ほかに御用はないかと聞いてくれた。

学生時代一度だけ行った代々木本部とくらべて、P C I の開放性と親切にすっかり感激した。ほくは舞い上がったしまった。街で見たP C I の選挙ポスター「ヒロシマの悲劇を繰り返すな」と「ピアフラの飢えを救え」が欲しい(なんと国際主義の党かとまたまた感激しながら)と、ますます凶に乗ってしまった。彼はまた奥に引込んで、今度はニコニコしながら二枚のポスターを丁寧に巻きつつ、「書記局に貼ってあったものしか残っていない。少し汚れているが、これで我慢してほしい」と、握手しながら渡してくれた。

彼我的決定的なちがい

ほくはベルリッングエルの歴史的和解路線(近い将来、政権奪取可能と考えたP C I は、アメリカと反動勢力のクーデターに備えてカトリック勢力およびキリスト教民主党との歴史的ブロックを構想)は階級和解路線とまでは思わないが、チリのアジェンデの挫折(C I A とチリ軍部の共謀クーデターで、民主的に政権に就いたアジェンデ政権は崩壊させられた)からの教訓を後ろ向きに総括したものと考えていた。ほくはすでに離党していたルーチョ・マガラウイル・マニフェスト派の「資本主義的・民主主義的オルタナティブでなく、社会主義的・左翼的オルタナティブを」の主張に親近感を抱いていた。一九九〇年のP C I からP D S (左翼民主党)への転換にあたっては、オッケットのリアリズムを了解しながらもイングラオのベシミステ

イックな苦悩の方により共感する。

であるが、グラムシとトリアッティを単純に対比させ、後者のしなやかな現実感覚を汚濁にまみれた行為として論断し、前者の澄明な思想性によって後者のしたたかな実践力を裁断することは非歴史的であり、唯物論的でないと考ええる。同様のことはマグリとロンゴやベルリンゲル、イングラオとオツケットの関係においても言いうるであろう。

PCIを軸にするイタリアの共産主義運動は日本におけるそれと同程度の長さの歴史でしかないが、自己の胎内からムツソリーニのファシズムを生み出したことについての思想的・道徳的内省が深く厳しく刻み込まれていると考える。獄中でのグラムシの思索、トリアッティのイタリアにおける民主的社会主义への道、ベルリンゲルの歴史的和解路線とそれへの左派の批判、PDSへの転換と党内外の大論争を通

底するのは、一九二二年（ムツソリーニの政権掌握の年）の敗北に、つねに立ち帰って思考しようとする彼の国の思想と運動の歴史主義の伝統である。転向者や別の党派、戦線に移った人間に對して「裏切り者、変節者」よばわりし、それでもって自己の無謬性を誇示し、唯一絶対の正統性の証あかしとしたり、あるいはろくな総括もせずにとつかえひつかえ新しいキヤッチコピーをひねり出すことに熱中する此の国の左翼の非歴史主義的な伝統とは根本的に違うのである。

多くの最初のイタリア旅行は、このようにすこぶる政治的な旅であった。

多極分散の都市国家

八〇年代は社会主義理論政策センター（一九七七年創立、九七年解散）の仕事の関係もあって、もっぱら中国に出かけた。韓国にも二度出かけたが、ヨーロッパには行かなかつた。イタリア

を再訪したのは九〇年、阪神航空社のパックツアーに参加してである。ヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ、ローマにそれぞれ三連泊し、最後の一日は自由行動というパックツアーにはゆつたりした日程が気に入ったのだ。

パックツアーの良さは、旅のしかたにもよるが安上がりで効率よく回れることと、参加者のいろいろな人との出会いを楽しめることである。この旅をふくめてパックツアーは数回体験したが、今でもつきあっている人がたくさんいる。

この旅を契機に、ぼくが鼻肩するイタリアは「PCIのイタリア」から「街と人と料理のイタリア」に移った。四年からは三、四週間くらいの日程で個人旅行をするようになり、これまで一七回イタリアを訪れている。北はアルプスから南はシチリアまで行ったが、自動車を運転できないので、鉄道、バスを乗り継ぐか、現地の小旅行ツア

ーを利用する。最近では日本の旅行会社の「現地合流」という手を覚え、不便なところはそれを利用してしている。

ローマ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ナポリなど大都市に一週間くらい滞在して、近郊の中小都市に日帰りか一、二泊で出かけるのが多くのパターンだ。古代、中世、近代が三層に折り重なっているローマは雑然としているが独特の味わいがある。それに対してフィレンツェは中世風秩序が整然とした、街全体が博物館のような趣がある。ヴェネツィアの大運河沿いのカフェテラスでワインを飲みながら、対岸の貴族や大商人の館と行き交う大小の船をただただぼうつと眺めているだけの怠惰の時間は何ものにも代えられない至福のときである。

鶴橋や西成に似たスパッカナポリの猥雑な雰囲気は、スリかっぱらい詐欺師の跳梁も含めて興趣尽きるところがない。鶴橋のチヂミ、西成のお好

み焼き、ナポリのピッツァと庶民の食の好みまで共通しているのが面白い（いずれもともと貧乏人の食べ物だった）。大阪市は何を勘違いしたのか、ミラノと姉妹都市になっているが、ミラノは東京であって、犯罪発生率ナンバーワン同士であるナポリこそ姉妹にふさわしい。

大都市の面白さとは別に、イタリアが都市国家であった趣を残している中小都市はえも言えぬ風情がある。思いつくままに列挙すると、北部ではベルガモ、ペローナ、マントヴァ、パルマ、クレモナ、パドヴァ、ヴィツェンツァ、トレヴィーゾ、中部ではラベンナ、ボローニア、シエナ、アッシジ、ルッカ、南部ではパレルモ、アグリジェント、シラクア、タオルミーナ、ソレント、ポジターノ、アルベロベッロ、レッツェ、マテラ。

日本では東京に権力も富も情報も一極集中しているが、イタリアではこれら中小都市も含めて多極に分散してい

る。中世都市国家の市民の自立精神とそれぞれに個性的な町の佇まいがそのまま現代に蘇ったように感じるのだ。政治、経済はもちろんのこと、大学、メディア、ファッション、グルメに至るまでこの国では東京が中心だが、イタリアではそれぞれの都市がおおいに自己主張している。

たとえば料理についていえば、この国では食材、味付け、盛り付けに至るまで、関西を除いて、すべて東京風が一流に格付けされている。全国、いや世界から高級食材を取り寄せることができ、資金力を有し、それを食することができる余裕のある階級は東京に集中している。ところがイタリアでは食材はその土地で採取される旬の物、ワインもそれに合った銘柄が最高に美味い。ナンバーワンではなくオンリーワンを競っているのだ。

ついでに言うと、カメリエーレは接客のプロ中のプロであるから、たとえ

言葉が通じ難くても、嫌な思いをさせられることはない。日本、とりわけ東京ではちよつと有名になると、板前や店主が「食わせてやる」式の無礼千万の店がのさばっている。それに食傷気味の者としては、イタリアではついついチップをはずみすぎってしまうのである。

日本人が捨ててしまったもの

イタリアの街は、健脚の人ならローマも含めて徒歩で用を足せる。中世都市のスケールをそのまま引き継いでいるヒューマンスケールの街なのだ。中世や近代初期の建物の大部分が残っており、それらは遺跡として鑑賞するのではなく、ホテルやレストラン、商店、集合住宅として人びとの生活のなかに生きて使われている。石畳が破損してもアスファルトにせずに破片をひとつひとつつなぎ、あるいは似た石を探してきて修復する。

どんな小さな街でもボールと広場は

必ずある。ついでにいうと、こんな街にと思う街に、「グラムシ通り」がある。グラムシは統一国家形成の英雄や国王と並んでイタリア人にそれほど愛され、尊敬されているのだ。

人びとは朝食に始まり日に数回のコーヒーブレイク、仕事帰りのちよつと一杯まで、それぞれ鼠兎のボールに立ち寄り、とりとめもないことを駄弁っている。広場は、朝は青空市場になり、夕方はちよつとおめかしした老若男女が集い語らう場所である。イタリア人はこうして日がな一日コミュニケーションしているのだ。

イタリアに足繁く通うようになって、日本という国のかたちがよくわかるようになった。日本料理、とくに家庭料理は世界でもトップクラスだといふことがわかった。万能ソース醤油はイタリアのトマトソース以上のすぐれものだ。中小企業や職人のものづくりに技術、自然と折り合う日本農業の卓

越性は目をむくばかりである。スーパー、コンビニに駆逐されつつある市場のよさはイタリアに通うたびに再認識する。京都、金沢、飛騨高山などの街並みの破壊はとり返しにつかない愚行である。

この国は戦後一貫してアメリカナイズしてきた。その結果、前述したすぐれものをことごとく捨ててしまった。これらを捨てることは、それを媒介にして成立していた人と人、人と自然のコミュニケーションを破壊し捨ててしまったということだ。

捨てられる前に、こつちからこの国を捨ててイタリアに住みたいと思う今日この頃である。

こてらやま・やすお

一九四〇年神戸生まれ。神戸大学文学部卒。元兵庫県警守連委員長。七七年～八八年、社会主義と労働運動誌編集長。現在、市民の政治新聞「ACT」編集長。コラム「いずみ」が好評。